

子どもの規範意識に関する現状分析と 意識向上の方途についての一考察

The present conditions about the model awareness of the child and one consideration about the expedient of the consciousness improvement

塩澤 雄一
(Shiozawa Yuichi)

Abstract :

There are many problems in schools by declines in children's norm consciousness. Norm consciousness is that a man can admit worth to some phenomena when a man judge some phenomena. Declines in children's norm consciousness means that many children do not admit worth to nonviolence, greetings and so on. I think that factors of consciousness change are social changes and cognitive develop disorder. And I believe that two factors are correlated. Declines in children's norm consciousness are related to antisocial acts of young people and young people's behaviors at their schools and homes. I would like to research the educational method to decline in children's norm consciousness as a researcher for student guidance.

キーワード：規範意識、生徒指導、学校と家庭

Key Word : norm consciousness, student guidance, school and home

はじめに

今、学校現場は規範意識の低下による課題を多く抱えている。規範意識とは、「ある対象に価値判断を下す際、その前提となっている価値を価値として認める意識（大辞泉）」と説明される。規範意識が低いとは、規範や社会的ルール「暴力をふるわない」「挨拶をする」など様々な意識や行動について、価値として認める意識が低いということになる。この意識の変容の要因としては、社会の変化に伴う価値の変容ととらえる立場と、個体の認知発達に由来する立場とがあるが、どちらかという考え方よりも相補的に考えていく必要がある。この規範意識の低下は、青少年の非行や犯罪など、反社会的行動の増加と共に、学校や家庭での児童生徒の問題行動の増加にも見られる。様々なデータから、この規範意識の低下には、今日の学校や家庭のあ

り方に大きな原因があり、その改善に向けて学校や家庭はどう対応したらよいのであろうか、ひとつの方策として本論考では生徒指導の見地から究明する。

1 規範意識の低下の現状

(1) 小中校生の暴力行為の増加

小中高校生暴力行為発生件数が年々増加し、平成21年度はついに6万件を超え、調査を開始してからの発生件数では毎年記録を更新し続けている。過去10年間を見ても、平成12年には34,595件だったのが、平成21年度には60,913件と2倍近く増加している。特に、10年前に比べて中高生は1.8倍程度の増加に対し、小学校での発生件数が7,115件と5倍に跳ね上がっていること、対人暴力や器物破損は大きな増加が見られないのに対し対教師暴力、生徒間

暴力などの増加率が高いことが特徴である。¹⁾

暴力で物事を解決しようとする児童生徒の増加は、規範意識の低下が、暴力で物事を解決しようとするこのような風潮を生み、問題行動を多く発生させている要因となっていると考えられる。少なくとも、学校教育を受けている児童・生徒がこのような問題行動を起こすということは、学校における生徒指導上の大きな課題である。

(2) 国際比較に見る日本の青少年の規範意識の特徴

日本の中高生の規範意識を諸外国（日米中韓）の生徒と比較した調査²⁾によると、日本の生徒は「絶対してはいけない」と回答している割合が多い項目は「万引きをしてはいけない」「麻薬を使ってはいけない」といった法で禁止されているような項目であり、他の国とあまり大きな開きはない。これに対し、「家出をしてはいけない」「学校をサボる」といった項目が4カ国中極端に低かった。清水賢二氏ほかの12年前と現在の中学2年生に対する調査結果³⁾からも、規範逸脱の許容範囲について、「たばこを吸う」「物を盗む」など反法的規範行為や反社会的慣行行為については「してもよい」と回答していた。比較してみると、あまり大きな変化はない。そのことは、刑法犯少年が平成元年の約20万件を契機に毎年減少を続け、平成21年度のは10万件を割っている（警視庁調査）事からも伺える。しかし「先生の言うことには従わない」「親の言いつけには従わない」といった反学校、反家庭内規範行為は、「してもよい」という規範を逸脱した回答が多く、また12年前より増加している。

このことから、法的規制はないがモラルに反する行動に関しては規範意識が低く、法律違反については家庭や学校で厳しく指導されるが、モラルに関しては学校でも家庭でも指導があまりなされていないか甘いと判断できる。法や社会の慣習に関する規範については、様々な場で指導がなされているが、学校の教師や親に対する規範については、学校、家庭、社会すべてにおいて十分指導がなされていないのではないかと。

また同国際比較調査「社会への関心」によると、自分の参加によって社会は変わる、積極的に関与したいと答える中高生も他の3カ国が6割から7割が関わることに前向きなのに対し、我が国は4割弱と4カ国中で最も低かった。

もう一つ特徴的な調査がある。それは、道徳的な行動についても、「近所の人にあいさつする」など8割近くの児童生徒が「できている」と回答しているにもかかわらず「友達が悪いことをしたら、やめさせること」に関しては「そうする」と回答した児童は4割、生徒は2割5分と少なく、特に年齢が進むにつれてその割合が低下している⁴⁾。このことから、友人関係においても、周りを気にして正義感を貫こうとする規範意識が十分育っていないこと、できるだけ、友人や社会の面倒なことには無関心を装い、関わりをさげようとする青少年の意識が伺える。

(3) 年代による保護者の規範意識の変化

全国国公立幼稚園長会の調査⁵⁾によると、30～40代保護者と20歳代保護者では、規範意識のずれがある。特に「保護者会での私語」で15ポイント、「子どもを連れて歩きながらのメール」で10ポイント、「電車の中での化粧」14ポイントなど、20歳代保護者の規範意識の低さが目立つ。親世代にまで、規範意識の低下が見られることから、社会全体で規範意識の低下が連続的に進行しており、その親に育てられる幼児世代の規範意識が高くなるという事は考えにくい。中高生で低下した規範意識がそのまま成人しても回復せず、そのまま親世代となっている事から、学校、家庭、社会は青年期にしっかりと規範意識を植え付ける工夫が必要である。

2 規範意識低下の背景にあるもの

暴力行為の増加や少年非行など児童生徒の様々な問題行動が、社会的な批判を浴び、学校、家庭、地域の大きな課題となっている。その背景にあるものは何か、全国20歳以上の成人を対象とした調査によれば、その原因として「社会全体の規範意識の低下」が58%、「他人の子どもに無関心」が55%と高く、そこに挙げられた事柄は社会の責任と認識している回答が多い⁶⁾。

テレビ等のマスメディアからの影響、人間関係の希薄さからの地域社会の崩壊など様々な要因があると私は考える。特に、子ども達の生活実態調査（ネットリサーチマクロミネ2004）から、テレビの視聴時間は小学生で1日平均2から3時間と、かなりの割合を占めている。その番組内容は、規範を守ろうとする行動を笑い飛ばしたり、まじめに頑張ることを笑いの種にするような場面が散見され、問題がある。現代の子ども達は、一番身近な親や近隣の大人の生き方に接するよりも、テレビに登場する人物の生き様に接して育っている。かっこよく、派手な人間が人生の成功者であるかのようにとらえられていることが多く、本来児童生徒のあこがれを持ってほしい政治家や、官僚、教師といった人間が余りよいイメージで登場しないことが多いように思う。現に中学生の尊敬する人物のベスト5は1位「スポーツ選手芸能人」であり、2位「母」3位「先輩」「4位歴史上の人物」5位「父」という結果であり、政治家、教師は番外である。

こうした傾向は教育上の大きな課題である。子どもに直接関わり第一第二に責任があるのは親であり教師である。教師や親が、家庭、学校、社会で子どもにどう関わり、どう問題の解決に当たっていくかが問われる。

日本の子どもの特徴として、自尊感情の低さが挙げられる。⁷⁾「自分はだめな人間だと思う」に対して「そう思う」と回答した中高生は、我が国は60%を超えるのに対し、米国、中国の中高生は20%を超えない。「人並み以上の能力がない」「将来に不安を感じている」と回答する中高生も、他国に比べると多い傾向にある。自分は有能である、自分には人にはない取り柄があるというポジティブシンキングのできる子は、自分の行動に自信が持て、何事にも前向きになり、規範意識の高まりが行動に表れると考えてよいであろう。

(1) 学ぶ意欲の低下

この自尊感情と学力に筆者は注目する。全国学力学習状況調査の結果から、国語と算数・数学の得点分布で、標準偏差が小学校平均が3.7に対し、中学校になると5.8に広がる⁸⁾。学習内

容が高度になることはひとつの要因であろう。しかし、校種学年が上がるにつれて、勉強のわからない児童生徒が増え続け、学力の二極化三極化と言われるように学力格差の広がりが見られる。学業不振による自信喪失が自尊感情の低さにつながる、それは学力による序列化が原因であるとする考えもあるが、それ以前に、学校教師が学力向上に向けての改善に向けた努力を十分にしていなかったことに起因すると考えられる。ある中学校の授業参観で、教師はある一人の優秀であろう生徒の発言を取り上げ授業を進めていく、多くの生徒は話も聞いていないのに授業はどんどん進む。この授業の進め方はおかしいのではないかと中学校の元管理職に質問すると「高校受験に間に合わせるためにスピードを上げる、このような授業形態もあるのだ」と言われたことがある。

授業がわからないままに置き去りにされた児童生徒はどうなるのか。授業そのものが苦痛になり、学ぶ時間は苦痛の時間となる。そんな児童生徒が学級の大半を占めるようになれば、当然授業に集中しなくなり、集団全体が無気力となり集団の規律が乱れ規範が崩壊していく。

(2) つながる意欲の低下

一方、「まじめの崩壊」（千石保著 1991 サイマル出版会）同様、我が国独特の「恥の文化」（ルーズ・ベネディクト「菊と刀」1946）が崩壊しつつある。宗教に根ざした道徳観が弱い我が国において「世間様に笑われる」といった、世間、地域に根ざした生活の習慣から逸脱する行為を抑制する恥の意識の低下により、他人の目を気にしない、こわくないといった、諏訪哲二氏が著書「オレ様化する子どもたち」（2005 中公新書ラクレ）で言うような俺様化した児童生徒が増加してしまっている。

自由平等、個性第一の生活スタイルの定着により、親・教師といった上下関係による関わりが少なくなり、子どもを叱る、ほめる、認めるといった関わりが少なく、人との関係において成り立つモラルを教え育むことがなされにくい状況となった。このような関係の中で、人間関係がうまく作れない子供が増加し、地域社会とのつながりの薄くなった親や教師も孤立し、そ

れが子どもたちにも影響を及ぼしている。

保護者も規範意識が育っていないと感じ「しつけ」をどうするか、筆者が学校現場で接した多くの保護者は悩みを持っていた。しかし、それを相談する相手もなく、子どもを育てることに自信を失った親は、子どもに対しても上手く対応できずにいる。近年、大きな問題となっている「児童虐待」の問題も、親自身が子育てに自信がなく、親の規範意識が育っていないことが一つの原因ではないかと考える。保護者の悩みを解決すると共に、保護者自身も子育てについて学び、規範意識をしっかりと身に付ける必要がある。

3 児童生徒の規範意識を取り戻すために

(1) 学ぶ意欲を育む

長崎県の教育委員会では、学力の向上策として、家庭学習時間を増やすよう各学校に働きかけた。その結果、小中学生の家庭学習時間は増加し、テレビや漫画の視聴時間が減少し、それと共に過去の調査に比べ児童生徒の規範意識の高まりが見られたとの報告がある⁹⁾。

学力と規範意識には相関関係がある事は以前から教育現場で指摘されているが、まさにこの調査はそのことを明確に示している。学校が荒れる、子どもの生活が落ち着かない、といった状況が見られる学校や学級は当然授業にも影響し、十分な学力がつかないということもあるが、学習時間が充実し、積極的に学習活動に取り組める状況にある子ども達は、それ自体規範意識が高いと言える。どちらが先というわけではなく、学力と生活は車の両輪のようなものである。頭がいい悪いの問題でなく、真面目に学ぶ環境で学ぶ楽しさを知ることが規範意識の向上になると考えられる。

それがいつから勉強は苦痛の代名詞になってしまったのであろう。現代はそうでなくとも安易で魅力的な楽しいことが沢山ある。しかし簡単ではないが「学ぶ」「知る」「わかる」楽しい経験や自分ができた喜びこそ自信になり、前向きに物事に取り組むことが規範意識の向上につながる。学ぶ楽しさは楽しい授業から、それは面白おかしい授業ではなく、新しい発見や感動

のある授業を学校、教師が創造することこそ、規範意識の基本となる。

(2) 学校、家庭、地域の有機的なつながり

長崎県の調査では、学習と同時に家庭の楽しさと規範意識の高さとの相関も指摘している。家庭生活が楽しいと答えた児童生徒の規範意識はそうでない児童生徒より高いという結果も出た。何よりも家庭生活が安定し、親が自信を持って子育てに当たり、よりよい家庭生活の環境、学習環境を作ることが規範意識の向上に繋がることが示唆されている。家庭の楽しさ、安定は親が安定していること、家庭生活に自信と誇りを持っていることが何よりも大切である。

しかし、核家族化が進む中、自分の子育てに自信が持てず悩む保護者は多く、またその悩みを相談する相手もなく悩みを深くしている。筆者が勤務していた公立小学校、併設幼稚園では、保護者同士のつながりが非常に強かった。公立幼稚園のため、毎朝保護者は園児の手を引いて登園する。そこに集まった保護者同士、毎朝挨拶、コミュニケーションが始まり、日々強い人間関係が築かれる。そこにはリーダーが生まれ、子育てについて、親としてのあるべき姿が語られる。近隣の保育園も同様の関係が築かれ、共に地域の小学校に入学してくる。そこでも、教師を巻き込んで新たなコミュニティが生まれる。このコミュニティはPTA活動などで学校だけにとどまらず地域社会にも広がり、地域全体の子育て機能を発揮するようになることを経験した。

地域の子育て機能が脈々と生きている地域も多くある。本来我が国の学校は、ヨーロッパ諸国の教会同様、文化の拠点であった。そこに住む人々はその学校で学び育った。特に歴史のある学校は「おじいさんの学校、お母さんの学校、そして私の学校」と3世代が共に通い、その町に暮らす人の大切な母校となっている。学校を愛することは、そこに通う子ども達を愛することになる。通学の安全を守るために街角に立つ先輩、子ども達のためにボランティアで放課後や休日に学習支援をする人、最近では、文部科学省の後押しもあり、安全ボランティア、図書ボランティア、学習ボランティア等全国各地で

様々な学校支援ボランティアの導入が進んでいる。そこでの大人と子どもの接触が規範意識向上に資することは、大であると確信する。

我が国の規範意識のバックボーンは世間、町場の文化、風土にある。地域社会の教育力を取り戻すことが、児童生徒の規範意識の醸成につながる。孤立し子育てに悩む親を巻き込み、地域の親子として受け入れ、共に子どもを見つめ大人がみんなで毅然として物事の善悪を子どもたちに示し、それを姿で見せれば、児童生徒の規範意識は向上するであろう。

近年公立小中学校において「学校自由選択制」を導入する都市が多くなっている。このことが地域の規範意識低下の一因であるとも考えられる。保護者のニーズに応え、学校に競争原理を導入して教員の意識改革を促すことを目的としている。しかしこの結果、地域に子ども達がいなくなり、遊び集団が崩れ、地域住民が近所の子どもと無縁になった。地域の「子育て機能」に大きなダメージを与えたといえよう。

少年非行に影響を及ぼす社会風潮として上位3項目は、「社会全体のモラルの低下」「他人の子どもに無関心」「社会全体から心の豊かさ、思いやりが失われている」といった社会全体の在り方があげられている¹⁰⁾。また、子どもの規範意識を培うための有効策として多くあげられた項目は「人とふれあい、子どもに活動の場を与える学校、家庭、地域が一体となって子ども達とふれあい、自己有用感を与え、自尊感情を培うことが必要である」といった回答である。学校、地域、家庭の三者が有機的に機能し、積極的に関わり、規範について語り、共に行動し、一人一人の児童生徒を三者がそれぞれ自分たちの子どもとして愛情を持って育てることが、今崩れかけている児童生徒の規範意識向上への鍵となろう。

4 学校の児童生徒指導のあり方

現代の風潮として法に触れることは守ろうとする規範はあるが、社会の慣習、特に親や教師への態度に関する規範意識が低い。いつの時代から、親や教師を敬うといった精神が希薄になってしまったのだろう。マスメディアの影響も

大きいと思われるが、あまりにも教師や親に対する世間一般の評価が低すぎるのではないか。一部問題のある教師や親を取り上げ、「今時の親は、教師は」と一般化し批判の対象にお互いがすることはやめにした。本来学校がすべきこと、家庭がすべきことの役割を明確にすること、そしてそれぞれの立場で努力していることを認め、どちらも子どもの成長のために最善を尽くしていることに対し尊敬し信頼する関係を、社会全体で作らねばならない。規範意識低下という問題の解決の有用な手立てと考える。

多くの教師や親は悩みながらも懸命に子どもの将来を考え頑張っているのが現状であろう。もっと教師や親は自らの教育や子育てに自信と誇りを持つべきだが、確固たる信念が持てず、子どもに迎合したり安易な方向にながされることにより、明確な判断が下せず規範意識の崩れにつながっている。

(1) 毅然とした態度で生徒指導に当たる

事の善悪、価値をしっかりと大人が示すことに躊躇することは、結果的に児童生徒の規範意識の低下につながる。教師に対し、児童生徒はしっかりとした考えを持って接してくれることを望んでいる。教師が児童生徒の信頼を失うのは、人によって判断がぶれたり、毅然とした態度で事の善悪を示せないときである。まず、教師が信念を持って規範を示すこと、一貫した態度で児童生徒の進むべき方向を示すことができる教師を子どもはあこがれ尊敬する。

(2) 生徒指導の基本は学習指導であることを再認識する

学校は「わからなかったことがわかる」ところ、学ぶことの楽しさがわかり充実した時間の過ごせるところ、児童生徒がこのような気持ちにならなければ、一人一人が規範意識を持ち、自信と誇りを持って日々前向きに生きる力をつけることはできない。そのためには、学校・教師が魅力的になること、魅力ある授業の提供者となるべく授業力、指導力をつけるために力を尽くすことである。児童生徒一人一人が「わかった」「できた」の体験こそ、自信と誇りを育て、規範意識を育てたい。

(3) 地域保護者をパートナーとして生徒指導を展開する

学校の教師が信頼され、尊敬されるような教育を行っていくことはもちろんであるが、保護者地域のバックアップがなければその力を十分に発揮することはできない。学校、教師は積極的に地域、保護者に働きかけ、情報を発信すると共に情報収集に努める。そのときに力になるのがPTA組織である。これからは、このPTA組織が、教師と保護者、保護者と地域のつなぎ役として大いに活躍が期待される。学校、教師はその一員であることを自覚し積極的に関わり、その組織に携わる保護者との信頼関係を築く。児童生徒にとって教師と保護者が同じ価値観で進むべき方向を示してくれる、教師と保護者が自分の情報を共有している、愛情と信頼感をもって同じように接してくれる、心配もしてくれる、近所で共に暮らす人々も自分をしっかり見てくれている、そんな環境で育つことこそ、規範意識を育てる上で最も大切なことである。

おわりに

児童生徒の規範意識の低下が指摘される今日、悩める子ども、保護者、教師の姿がある。これは、社会全体の風潮であり社会全体の意識変革が必要である。しかし、このことを教育実践者として座視できない。厳しいことであるが、現実には児童生徒と関わりを持つ親と教師がその第一義的責任を負わなければならない。本論ではそこに視点を当て論述を進めてきたが、結論としては、親、教師それぞれが自分の役割をしっかりと果たすことにあると言わざるを得ない。教師は「勉強をしっかりと教える」親は「きちんとしつけをする」この当たり前の責任をしっかりと果たすこと、そして、子どもを育てる最良のパートナーとして手を携えることではなかるうか。現実の対応においては、親と教師、地域の連帯が必要である。この連携の在り方について、今後研究を進めていきたい。

【注】

- 1) 文部科学省「小中学生の暴力行為発生件数の推移」(2010)『日本子ども資料年間』343頁
- 2) 財団法人日本青少年研究所「中学高校生の生活と意識」(2009) Benesse『教育開発研究センターが選ぶ調査データクリップ!子どもと教育』1頁(2007)
- 3) 清水賢二ほか「社会規範に対する少年の態度と意識に関する研究—1987年調査と2001年調査の比較分析」『人間研究』40巻23-36頁(2004)
- 4) 国立オリンピック記念青少年総合センター「青少年の実態調査」(2006) Benesse『教育開発研究センターが選ぶ調査データクリップ!子どもと教育』2頁(2007)
- 5) 全国国立幼稚園長会「子どもの気になる行為保護者全体と20代保護者の比較」2009『規範意識の芽生えを培うプログラムに関する研究』8頁(2010)
- 6) 内閣府大臣官房政府広報室「少年非行等に関する世論調査」2005 Benesse『教育開発研究センターが選ぶ調査データクリップ!子どもと教育』2頁(2007)
- 7) 財団法人日本青少年研究所「中学生・高校生の自己像」(2009)
- 8) 文部科学省「全国学力学習状況調査結果」『日本子ども資料年間』256-259頁(2009)
- 9) 長崎県教育センター「児童生徒の社会性規範意識調査研究報告」5頁(2007)
- 10) 6)と同じ